



Title	韓国の伝統仮面劇「タルチュム」研究
Author(s)	張, 起權
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43286
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	張 起 權 <small>ちゃん き ぐん</small>
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 16481 号
学位授与年月日	平成13年7月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	韓国の伝統仮面劇「タルチュム」研究
論文審査委員	(主査) 教授 木村 健治 (副査) 教授 北村 卓 教授 高岡 幸一

論文内容の要旨

現在韓国において伝承されている伝統劇は大きく三種類に分けることができる。それは、人形劇とパンソリ、そして仮面劇のタルチュムである。その中でもタルチュムは演劇としての必要条件が備わっており、最も代表的な位置を占めている。

タルチュムとは、mask すなわち仮面を意味する‘タル’と、舞を意味する‘チュム’による合成語であり、仮面舞または仮面劇と訳することができる。

タルチュムは儒教的価値観を基に厳格な身分制度が敷かれていた朝鮮時代に、民衆の手によって生まれた風俗劇である。それゆえタルチュムの中には、当時の民衆の日常生活における関心事が諧謔的に描かれている。つまり厳しい封建時代を生きる民衆の目に映った宗教や社会、家庭の中の不合理な現実が、皮肉たっぷりに表現されているのである。

タルチュムは内容上の連鎖関係が形成されないため、「挿話的構造」または「オムニバス形式」と呼ばれ、全体の内容が起承転結によってつながるアリストテレス的概念の構造とは大きく異なっている。すなわち、タルチュムでは、各マダン（幕）において一つのストーリーが完結する。一つのマダンが終わり、また次のマダンでは、まったく別の登場人物によって別のストーリーが展開されるのである。マダンの間における連続性や関連性はなく、複数の主題や内容が混沌と存在している。各マダンは独立して一貫性がなくても、「葛藤構造と喜劇的終結」という大きな枠の中で互いに並列的な調和をなしているのである。またそのような因果のない要素が突然入り込む挿話性や、前後の条理が合っていない矛盾性などは、むしろタルチュムの喜劇性をより高める役割を果たしている。

タルチュムに関する研究には、歴史的、民族学的研究、起源・形成過程に関する研究、構造・構成原理に関する研究、外国演劇との比較研究、文学・芸術的側面からの研究などの分野がある。またタルチュムはさまざまな要素から成り立つ総合芸術であり、例えば台詞、歌、舞、仮面、衣装、舞台などを個別に取り上げ、研究対象にしてきた例も多い。

本稿では、これらの観点を総合的に取り入れ、タルチュムの全体像を把握した上で、タルチュムの持つ様々な側面に着目する。

第一章では、タルチュムがどのように発生し、そしてそれがどのように伝承されてきたかについて述べる。また、現在伝承されているいくつかのタルチュムの類型やその内容を把握する。

現在までの多様な起源説をまとめてみると、大きく「山臺劇起源説」、「伎楽起源説」、「祭儀起源説」という三種類に分類することができる。本稿では、三つの説についてそれぞれ述べながら、祭儀起源説が最も妥当ではないかという立場を取っている。つまり、韓国の仮面劇が巫俗儀式の一部として発展した演劇であり、農耕社会において豊穰を祝い、共同体民の無病や多産を祈る祭儀の一部として、タルチュムの原型が発生したとみる方が自然ではないかと考える。またこのことは、タルチュム全般に盛り込まれている祝祭劇的側面とも密接な関連性がある。例えばタルチュムの公演空間における特性、とりわけ観客の参与性や登場人物の多様性をみると、タルチュムが共同体的祭儀ないし祝祭に基礎をおいていることがうかがえる。

第二章では、朝鮮時代後期の社会変化に伴い、タルチュムがどのように変遷してきたかをみていく。特に封建社会の解体により民衆意識が成長したことと関連づけ、近代型としての都市タルチュムの成立過程について分析する。

17世紀以後の韓国社会は、都市の発展に伴って近代的な初期資本主義社会へと徐々に移行していく。それによってタルチュムの世界においても、従来の農村中心の閉鎖的な集団構造を持つ農村タルチュムの他に、地域や参加者の面で開放的な集団構造を持つ都市型のタルチュムが誕生することになる。つまりタルチュムは祭儀から民衆芸能へと変容し、現在のタルチュムとほぼ同一の形態を持つ「都市タルチュム」が成立したのである。

第三章では、タルチュムの公演空間と観客、仮面や舞の特徴、音楽と楽士の役割などについて分析する。

タルチュムを形成する主な要素は、伝承を可能にする定型性、社会文化的機能の実現手段としての祝祭性、そして喜劇的葛藤と和解の展開を可能にする喜劇性がある。こうした要素が有機的に融合して、タルチュムをタルチュムたらしめているわけであるが、本稿では、それぞれ第四章から第七章までにそれらが取り上げられている。

第四章では、タルチュムの演劇的特性について考察を行い、特に定型性、参与性および異化効果に着目して論述を行う。タルチュムでは、登場人物や構造、台詞の定型化がみられ、単純な葛藤を際立たせている。また観客や楽士らによる劇中への参与が、比較的柔軟に行われる。このようなタルチュムにおける観客や楽士の参与は、劇の流れに重要な要素として作用し、演者と観客の間に一種の共同体意識を形成することにつながる。

第五章では、タルチュムの持つ祝祭性を明らかにしている。タルチュムは、カーニバルにみられる祝祭劇的な要素、その中でも日常的秩序の転倒、新旧交代に象徴される対立構造などの面において多くの共通点を持っている。とりわけその逆転構造の類似性は着目に値する。またさまざまな葛藤構造の描写の過程において、リアルな表現や痛烈な風刺・批判の精神がみられるのも類似している。

タルチュムでは、権威や虚偽など民衆を抑圧するもののすべてが批判の対象になっており、宗教的には仏教の腐敗と儒教的倫理の不条理、社会的には支配層である両班の抑圧、また家庭内においては男尊女卑に至るまで、広範囲にわたっている。

しかし現実には、強力な封建体制の下でその価値観を覆すことや正面から対決することは不可能であった。タルチュムに表現されている民衆の抵抗は、既存の秩序を完全に覆し破壊するところにあるのではない。民衆の日常生活の中で感じられる悩みや不条理を、演劇の場において風刺することによって笑い飛ばし、カタルシスを覚えたのである。

またタルチュムは夏と冬、生と死に象徴される新旧交代という構造を持ち、社会的身分や立場にかかわらず、若くて力強い者が弱く年老いた者との戦いにおいて勝利をおさめ、新たな創造性と生産性をもたらす。

クライマックスが近づくとつれて、物語はやがて民衆が願う方向へと話がまとまっていく。最後にはすべての登場人物が身分や階層を超えて一つになり、共に舞いながら終局を迎える。まさにここに現実に対する民衆の超越と和解の精神があらわれているのである。

第六章と第七章では、タルチュムの核心部ともいえる風刺と諧謔を特に取り上げ、その根底にある精神構造と関連づけながら分析を行う。

朝鮮時代においては、朱子学的倫理観に基づく厳格な身分制度が社会の基盤を成していた。身分体系は世襲を原則としていたため、各層間には厳格な境界と隔たりが存在した。支配階層であった両班は自らの権力維持のために、下層民に対し厳しい差別と抑圧を行っていた。

16世紀後半から17世紀前半にわたり、朝鮮王朝では社会的混乱が増大し始め、各方面において改革が行われるようになった。さらに産業の発達と地主制の変化にともない、身分制度は徐々に揺らぎ始め、民衆意識が芽生え始める。

このような状況の中で確立した「都市タルチュム」の中には、支配階級である両班に対する風刺と批判の精神が必

然的に盛り込まれるようになったといえる。まさにそれが「両班マダン」として描かれているが、その中で両班批判の主演として活躍するのが「マルトゥギ」という下男である。

マルトゥギの性格は常に楽天的で遊び好きであり、厳格な身分制度下では考えられないほど、主人である両班に対して生意気な行動をとる。また両班の虚勢と無知を暴露しては場内の笑ひ者へと落としめる。この人物像は、まさに民衆の不満と欲求を代弁する分身なのだといえる。

またマルトゥギは、commedia dell'arte に登場するずる賢い召使いや、狂言の太郎冠者に相当する喜劇中の下男像の典型である。下男が両班に立ち向かうことは当時の現実社会では許容されない行為であったが、タルチュムという超現実的空間でのみ可能な日常的秩序の逆転が起こるのである。

両班に対する批判が最もよくあらわれているのは、マルトゥギの巧みな言語駆使の部分である。タルチュムの中の両班は、言語駆使能力がマルトゥギに比べ明らかに劣っている。マルトゥギの巧みな言葉遊びによって、両班はなすすべもなく追い込まれていくが、理解能力と知識が足りないため自分が弄ばれていることすら認識できない。日常世界では両班の特権分野である言葉と知識が、タルチュムの中ではマルトゥギの手に渡っており、まさに日常の逆転が行われているのである。

また両班マダンにおいては、現実世界において両班が最も重んじる儒教的価値観をマルトゥギが破壊していく。まず両班の出身に疑問を投げかけ、自分の出身の方がより正統であると主張する。さらに両班夫人の浮気にもふれ、その相手が自分であるかのようにほめめかす。出身に関することは身分制度に直接関わることであり、両班の地位自体を否定することにつながる。また夫人の浮気という事実だけでも両班の体面が損傷される事柄である上に、その相手が下男であるということは、当時の社会的風土の中では両班の家系が破滅しかねない致命的なことであった。このようなことは儒教的倫理観に真っ向から反する部分であるがゆえ、儒教的秩序が転倒される最も典型的な例といえる。

また第八章では、過去のものとしてのタルチュムがどのように現在に復興し、またその現代的継承版といえるマダン劇につながってきたか、その経緯などを考察する。まず1960年代から始まったタルチュムの復興運動を概略した後、それを受け継ぐ形として登場したマダン劇運動について、1970～80年代を中心に考察する。

タルチュムはその優れた演劇的かつ文化的価値にもかかわらず、1960年代に復興運動が始まるまで少数の人々により辛うじて伝承されていたのが実状である。またパンソリを継承した唱劇の場合と同様に、1970年代にタルチュムの現代的継承を掲げて始まった「マダン劇運動」を、現在活発に行われている伝承の要因の一つとして挙げる事ができる。マダン劇は、タルチュムの持つ演劇性と批判精神を受け継ぎ、現代社会を舞台にした現代の風刺劇として誕生したのである。つまり、伝統喜劇であるタルチュムを、その精神と形式を活かしつつ、現代的に再創造するというのがマダン劇の目標であった。とりわけタルチュムの影響が著しいが、農楽・クッ・パンソリ・叙事劇・写実主義的演劇等からも形態や様式を借用し、まさに伝統劇の現代的継承を実現した演劇であるといえる。1970年代の硬直した社会環境におけるマダン劇の登場は、民衆の現実認識と抵抗精神に多大な影響を及ぼすことになる。

論文審査の結果の要旨

本論文は韓国の伝統演劇の一つである「タルチュム」を演劇学的観点から総合的に考察したものであり、序章の後、第Ⅰ部（第1章、第2章）「タルチュムの伝承と近代タルチュムの成立」、第Ⅱ部（第3章、第4章、第5章）「タルチュムの演劇的特性」、第Ⅲ部（第6章、第7章、第8章）「下克上の世界、民衆の笑い」の三部と終章から構成されている。

第1章、第2章では、タルチュムの歴史的考察を行い、第3章、第4章では、タルチュムの基本要素である公演空間、仮面、舞、音楽に関する考察を行うと同時に、タルチュムにあらわれる「異化効果」の様相を分析している。また、第5章では、タルチュムの中に盛り込まれている日常的秩序の転倒や露骨な身分表現に着目し、これらの要素を、バフチーン理論を導入し解釈することによって、タルチュムの構造を明らかにしている。第6章では、両班マダンにおいて下男のマルトゥギと両班の間で繰り広げられる葛藤構造を分析し、特にマルトゥギの痛烈な諷刺の様相を分類し、その詳細を明らかにしている。第7章タルチュムに見られる葛藤構造と喜劇的終結についての考察、第8章タ

ルチュムの現代的継承の考察の後、終章のまとめがおかれている。

本論文は、単に韓国演劇史という狭い枠組みでタルチュムを考察するのではなく、ヨーロッパ演劇をも含む世界演劇という枠組みで、しかも、プレヒトやバフチーンという新しい視点を導入してタルチュムを捉え直し、分析しており、その成果を挙げるのに成功している。特に第Ⅱ部には著者独自の視点が盛り込まれており、観客との関係の中でタルチュムの演劇的特性が解き明かされ、また、タルチュムの上演空間における祝祭劇的構造が指摘されている。また、自らフィールドワークを行い、その結果を論文に盛り込んでいることも論文の説得力を高めていると言える。論文の構成は明晰であり、その日本語が論理的であることも特筆すべきであろう。あえてその難を挙げるとすれば、やや一般的な説明に流れる記述が僅かながら見られたことであろう。しかしながら、これは、本論文の価値を損なうものではないことは明らかである。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと判断する。